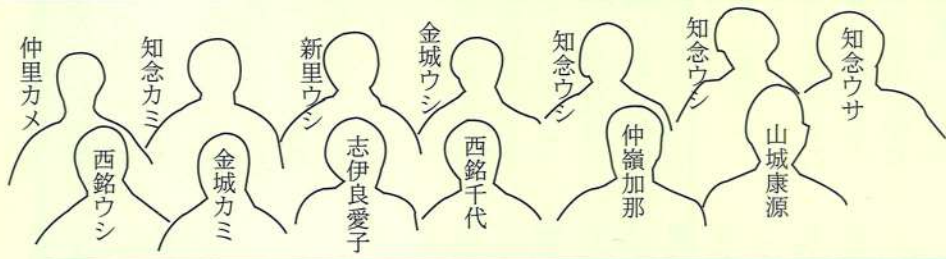




与那原町史だより

与那原町教育委員会 生涯学習振興課 町史編集室

TEL098-871-9981 FAX098-871-9982 郵送先 〒901-1303 与那原町字与那原712番地



大日本国防婦人会 大里村分会

作成協力：知念善達（板良敷区）

与那原町史編集委員会



●委員長
吉浜 忍
沖縄国際大学教授



●副委員長
真栄平 実
与那原町立網袋資料館長



●委員
新垣庸一郎
元高校教諭



●委員
山内 敏春
元小学校教諭



●委員
渡名喜興憲
元高校教諭



●事務局（町史編集室）
辺土名 彬、瀬底 雄子、恩河 直美、
富川 恵子、吉田 充泰



佐世保第2海兵団第13分隊 笛田分隊第10教班

前列右端 仲里全孝氏 1942(昭和17)年撮影

**聞き取り調査
人々の証言①**

**南洋の戦場
から佐世保へ**

仲里全孝
【当添区 大正12年生】

◆ **志願し、佐世保へ** ◆

私は、早く一人前になりたかったので、満一六歳の時に少年電信兵に行くことを希望したが親が許してくれな

った。昭和十六年、一八歳のときに父親の許可を得て志願し、テストを受けた。昭和十七年一九歳で佐世保に行くため那覇港からかぎ丸に乗り、大島經由鹿兒島に渡った。汽車で、佐世保について私は、九月一日佐世保第二海兵団に入団した。その日に筆記テストがあり、その結果、米山が世話係、私は副世話係をいつけられた。

◆ **新兵時代の規則として** ◆

入隊した二四〇名は十二教班に分けられ、一個班が二十名ずつで組織され、入団後には配置につかず、九月からの四カ月間は新兵教育を受けた。私たちが入団するころには速成の必要から新兵教育期間が六カ月からさらに短縮された。新兵教育は厳しく鍛えられ、体の弱い者は次々と倒れていった。

校門近くの建物の二階から外出員である班長や事務局員が出入りするのが見えた。訓練中は、脱走兵を防止するために外出員の出入りを見てはならないという決まりがあった。

ある日、私の班の田口が外出員の出入りを見ているところを当番の四教班長に見つかった。田口は午後、四教班長に呼び出された。そのときはもう大変だ

った。世話係が席をはずしていたので、副世話係の私が四教班長のもとに呼ばれ、言われるままに田口の顎にティクブシ(鉄拳)をふるった。翌日外出先から帰ってきた私の班の教班長が田口の顎の具合を気にして、四教班長との間で話し合いをもった。「仲里、沖繩の空手の達人が殴ったら死ぬこともあるから手加減なさい」とたしなめられた。

◆ **南太平洋の軍艦金剛に配属** ◆

後日、私が外で手旗信号を教えているときに、田口が制裁の腹いせにドスを手に追いかけてくることもあった。私は怖くなり、班長達のいる伍長室に逃げ込んだ。私の話を聞いた班長達はその後田口にお灸をすえている。

訓練を終えた私は昭和十八年一月に南方にある軍艦金剛に配属となった。トラック島へはあさま丸で渡り、島に停泊中の金剛に乗るまでには一週間かかった。金剛が旗艦となり、榛名を含めた二隻の戦艦に、巡洋艦クラスが三隻ほど、浅瀬まで行ける海防艦が四隻、駆逐艦や駆潜艇がそのあとに続いた。

金剛では、ひとつの砲台に七名がつき、弾詰めの作業をした。七名の他にも弾詰め作業を手伝う係、運搬する係、弾薬庫で作業する者もいた。第一砲手から第七砲手までがあり、私は第四砲

◆ **ナガナガでの空襲** ◆

昭和十八年三月、月岡トラジウウが率いる佐世保第五特別陸戦隊に配属され、ニューブリテン島のナガナガで陸戦訓練を受けた。訓練期間中のある夜、アメリカのマーチンという飛行機の空襲を受けた。一発が途中で破裂し、火の粉があがるバラバラ弾に驚いて、私は全速力で逃げた。島のおちこちに爆弾が落ちた。島の酋長の女の子が足を怪我して、木製の担架で運ばれてきた。この女の子は軍医の手当てで助かった。訓練後、ニューギニアのサラモアの戦闘に参加した。

◆ **フィンシュハーヘンに撤退** ◆

昭和十八年の十月三十日、サラモアでの敗戦により、フィンシュハーヘンに向け撤退することになった。サラモアからフィンシュハーヘンには山を歩いて行くのだが、南国ニューギニアといっても高い山の中は寒かった。寒さに耐えられず亡くなった人もいた。人間最後は気力だね。

サラモアの奥の山から撤退する途中に

は対岸まで百二十〜百三十メートルもある大きな川に椰子の木で仮橋が造られてあった。この橋のところでは飛行機から激しい爆撃を受け、榴弾砲の砲弾が凄かった。夕方に橋の前まで来ると橋が爆弾で壊され、渡るところがなくなっていた。それでもかまわずに渡河すると、兵器も重みのあるものばかりを担いでいたので、爆弾の跡などにズブズブと沈んでしまうこともあった。それでも何とか川を渡りきることができた。

渡った先には森があり、その後ろには掩体壕があった。そこにはガソリンが入ったドラム缶が埋められていた。敵の進攻に備えてガソリン入りのドラム缶を全部川上に二百〜三百メートル転がし移動させた。敵を待ち構えていたが、敵はなかなかこない。日が暮れてから敵の艇が現われ、川を渡り始めた。川の真ん中に来るとドラム缶に穴を開けてばんばん転がしながら火をつけた。水上は炎におおわれたので、敵はたまたま逃げた。そして私達はその日のうちにダイハツ（上陸用舟艇）二隻に荷物をいっぱい詰め込み、兵隊も乗れるだけ乗って、一時間半かけてラエに逃げた。

◆マラリアで苦しむ◆

ラエには日本軍の飛行場があった。

その他にも飛行機を隠す掩体壕や壕がたくさんあった。掩体壕のそばには床の高さが5尺ほどもあるトタン屋があり、そこにはマラリアにかかった六、七名の兵隊がいた。私自身もマラリアにかかり、熱で5尺上の床にもあがれずに床下で休んでいた。近くにある爆弾跡の水溜りで汚れた衣類を洗い、そしてトタン屋に戻ろうとして十五、十六メートルの距離に来たとき、トタン屋めがけて砲弾が着弾した。中にいた七、八名が犠牲になった。それで私は掩体壕に移りそこで寝た。

翌日の朝、部隊を探しながら飯も探し、鉄砲の弾も探した。あっちこっち倒れている兵隊のそばには必ず兵器も弾も落ちていた。

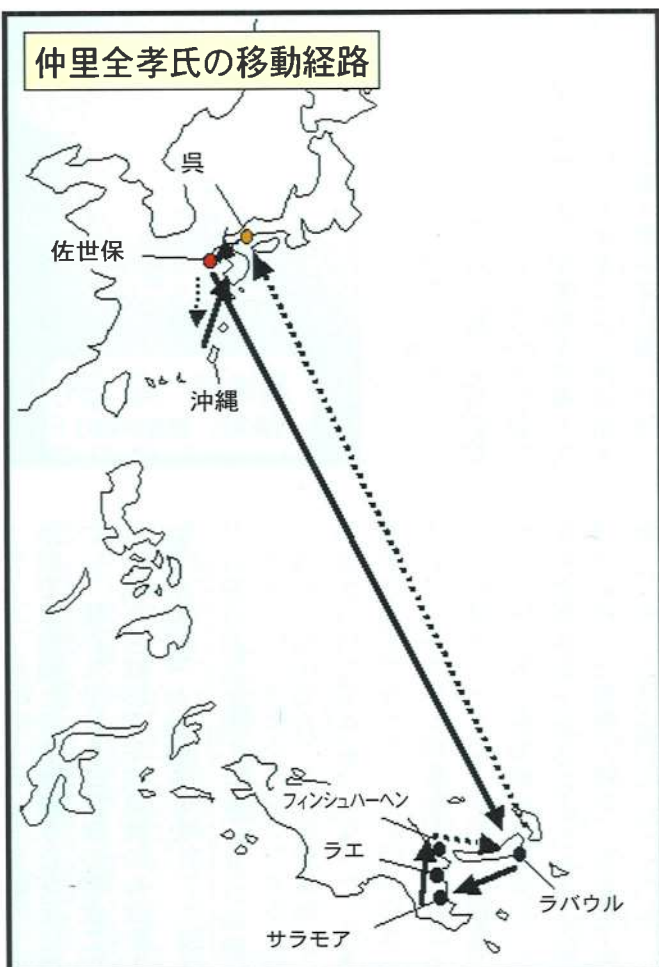
三日目の朝、二つ歳上の内間さんがあちこちの壕を探して私に会いに来てくれた。自分たちの部隊は撤退の準備をしているから一緒に行こうとのことであった。また、前任下士官から連絡がきて医務課の倉庫に僕宛の小包があったと聞かされた。それを聞いて私は元気が出た。小包の中には千人針と、砂糖がいっぱい入っていて、千人針は身につけ、「みんなで帰ろう」と砂糖は分けてあげた。このとき本当に自分を助けてくれる神様はいるのだと思った。部隊に復帰するとニューギニアの各地を転々と移動するが、どこをどう

歩いたか覚えていない。それでも四十三日間の行軍で、へとへとになりながらフィンシユハーヘンに着くことができた。

◆帰国し療養◆

翌日の晩、昭和十八年十二月十三日に潜水艦が来て、我々はその船でラバウルに渡った。私はマラリアのため第八海軍病院に一週間入院した。そこからまた病院船で十二月二十日呉海軍病院に送られた。三日熱と熱帯熱の混合マラリアで、高熱のため、意識がもうろうとするほど衰弱していた。

昭和十九年一月十七日佐世保病院に転院した。佐世保病院では三日間意識不明の状態が続いたが、看護婦さんがよく面倒をみてくれた。それから軍医の勧めもあり、一月二十一日佐賀県の嬉野海軍病院に転院し、温泉で療養した。二カ月ほど静養したのち、体力も回復したので、昭和十九年三月末佐世保海軍第二役員分隊に配属された。しかし、まだ完全に回復していないと、従兵班での仕事は、士官の世話をするということでした。



◆横須賀砲術学校に入校◆

昭和十九年十二月、横須賀砲術学校のテストを受け、入校した。私は探照灯専修班に生まれ、最初のうちは普通科の勉強をした。横須賀砲術学校の学長は皇族の三笠宮殿下であった。昭和二十年三月には東京も空襲に見舞われた。探照灯の訓練は夜間に行うのが普通であったが、訓練中は敵機の標的となることもあり、時には二メートル間隔で弾が飛んでくることもあった。

砲術学校では、陸戦の方法などを実戦的なことも教わった。軍部の主目的は即戦要員の育成にあったので、実弾による射撃練習も行われた。私は戦地帰りで、実戦経験も豊富だったので、三百メートル向こうの的によく当て、上手なほうであった。

昭和二十年三月に入ると、東京もたびたびB17の攻撃を受けるようになり、横須賀砲術学校も多大な損害を被った。十八、十九日頃には百二十名の生徒が参加して総仕上げの訓練が行われ、その後三月の末、横須賀砲術学校探照灯専修班普通科を終了した。

◆原爆の衝撃音を聞く◆

昭和二十年四月、佐世保第二役員分隊に配属された。六月に入って佐世保の市内が数回にわたり夜間攻撃を受

け、中心地は焼け野が原となった。敵の本土上陸に備え、陸戦訓練を中心に陣地構築に補充分隊の約五割の兵隊がたずさわっていた。

長崎への原爆投下時は現在の佐世保市三川内の山の中で陣地構築中であつた。落ちたときの衝撃は「ゴー」という長い音が佐世保まで聞こえた。瞬間は何が起きたかわからなかった。しばらくは「なんだろう?」とみんなで話した。長崎市は大きな爆弾でやられたということは、宿泊施設に帰る途中聞かされた。翌日佐世保に行くと、長崎から運ばれてきた被爆者を見た。見るに耐え難い様子であつた。その後、米軍機から原爆に関する情報ビラがまかれて原子爆弾だと知った。

◆終戦そして帰村◆

復員後佐世保のいとこのところに世話になり、昭和二十一年十月八、九日頃、佐世保から駆逐艦に乗り、久場崎(現沖縄市)に着いた。下船するとDT(害虫駆除剤)をまかれた。そのときは長嶺春康さんや照屋ゼンセイさんも一緒であつた。十月十日、当添に帰ってきた。



学年終了写真・昭和5年生
昭和16年頃、御殿山の敷地内にて。

中央教師は新里トミ先生、
2列目右から2番目は具志堅貞子さん。

聞き取り調査
人々の証言②

「命を繋げて」と残して

具志堅 貞子
【新島区 昭和5年生】

◆戦前のようす◆

私は、六歳の頃六区(現・中島区)で店(桑江商店)を営んでいた伯母の元に母親と妹と三人で那覇から移つて来た。小学校四年生までは大里尋常小学校の分校(現・青少年広場)に通つたが、昭和十六年に太平洋戦争が勃発

してから与那原国民学校に変わった。学校では勉強と防空壕掘りと交互に過ごし、後から学校も武部隊の宿舎になり、私たちはお寺や大見武のムラヤー(現・公民館)で勉強をした。

◆兵舎と兵隊◆

兵舎(浜田兵舎)の兵隊が昭和十八年頃から店に来るようになった。兵舎の中は左右に分かれ、床が段差になっていて、一人ずつの布団が敷かれてあつた。また、サイラー川近くの屋比久さんの家(現・新島区)を住まいにしていた将校の大林さんという方とは、兵舎にあつた酒保(売店)でお菓子を買つてもらうほど親しくなっていた。

あの頃、石部隊の事務所になっていた泉崎病院の城間院長の実家(現・中島区)には山原から来る材木を管理している兵隊が十人ほど出入りしていて、時には材木を防空壕までトラックで運ぶ事もあつた。

◆六尺棒と綱◆

昭和十九年頃になると、夜中に兵隊の死体を運んだ軍艦が入り、火葬に使う骨ガメやお香を買いに来てよく起きた。

その年の八月の末、学校からの通達で妹が学童疎開に行く事になった。那覇の港近くの旅館まで妹を見送つたが、

乗るはずの対馬丸は他の学童が乗船した。その船は敵の魚雷で撃沈された。それにより六尺棒と綱を準備するよう家に通知があった。母親は「そこまでしては行かせない」と、夜中に馬車を借りて妹を連れ戻した。

(※六尺棒と綱の使用目的は不明)

◆ 十・十空襲で ◆

十・十空襲の日は、家の近くの避難壕に隠れていた。すぐに破片や泥が飛んで来て、親川にいた朝鮮人が使っていたシンメー鍋が飛んで来たので、その朝鮮人は「アイゴー、アイゴー」と泣き叫んでいた。近くのハンザークムイ(当時・四区の警察署の裏の池)に爆弾が落ちたということだった。あちらこちらと葉莢が転がっている中を歩いて無事に家に戻ったのは夕方であった。

それから各区(当時・一区から十区)が山の方に防空壕を掘り始め、私たち六区は大見武の池田(現・西原町)近くに掘り、さらに兵隊の壕掘り作業(現・与那原町社会福祉センター)にも駆出され、後に大見武の壕にも兵隊が入るようになった。もう勉強どころではなく、知人から「仕事をした方がいいよ」と言われ、安国寺(首里)に移っていた地方裁判所で電話番の仕事をした。

昭和二十年三月二十三日、学校の卒業式の日であった。朝の七時頃に空襲警報のサイレンが鳴り響くと、すぐに隣近所が大騒ぎとなり、私たちは親戚の家に逃れたが、そこから宮城(現・南風原町)の知人の壕に移動をした。その後、自分たちの壕に避難した。その日は爆弾は落ちなかった。

四月初め頃だったか、「与那原が燃えている」と叫び声を聞き、新島の様子を見る為に急いで大見武の壕から家に向かったが、今の与那原小学校から御殿山のそばのサイラー川周辺は全部炎に包まれていたので家に行けず、また同じ道を通って壕に戻った。

◆ 南部へ ◆

戦火は日ごとに激しくなり、「大見武は危険だから」と母と妹三人で山を登って与那原方面を見ると、港は米軍艦で沖の方まで埋め尽くされていた。

しばらく歩いて池田に下りるとき、肉弾三勇士というのか、色が白く、頬を赤く染めた若い兵隊が日の丸の八チマキを締めて十人ぐらい整列し、隊長らしき人が一本ずつ菊の紋章が入った金鶏のタバコを配り、それに火を点けてあげた。兵隊たちはそのタバコを吸い終わると、そのまま一人乗りの舟(特攻艇)に乗り込んだ。たぶん突撃隊だと思うが、「日本は強い、戦争は必ず

勝つ」と私は思っていたので、国の為だから可哀想という気持ちもなく、戦争が怖いものだということもあまり感じず、「やっぱり、大和魂がそんなにも強いんだなあ」と思いながら見送った。南風原に下り、道が分からず、他の人に着いて同じ道を行ったり来たりとしながら夜通し歩き通した。その途中に妹がはぐれてしまった。母と探し回り、南風原陸軍病院跡のところまで来たが見つからなかった。私たちは仕方なく後ろ髪を引かれる思いで南部へ歩き出した。

◆ 炊事兵と ◆

その頃球部隊が炊事婦を募集していると知人に聞き、大城(旧・大里村)にある部隊で母親が炊き出しの手伝いをする事になった。大城部落から日本兵が中城湾に向かって野砲を撃ち続けたが、米軍からの艦砲射撃が多くなり、しばらくして米軍の上陸が始まったと聞いた。ここまで部隊と行動を共にして来たが、真境名(旧・大里村)の方からは米兵が攻めて来て、「ここにはいられない」と皆一緒にチリチリバラバラになった。母と炊事の兵隊の今宮さん(大分出身)、炊き出しをしていた仲吉エミ子さん(当時・与那原)、津波商店(当時・六区)の津波ヨシ子さんやその義妹と一緒に逃げた。ひたすら歩いて

いると、国吉(現・糸満市)で一軒の民家を見つけた。そこには足の踏み場もないぐらいたくさんの人が座っていた。翌朝、艦砲射撃で隣に座っていた親子が即死したのを見て、私たちは驚いてその場を立ち去った。

五月末頃、国吉には通信隊の基地(現・パームヒルズゴルフリゾート)があつて、ガウラ(湧き水)のそばで休んでいるときに通信隊が通るのを見た。兵隊の中から城間ヒロシさん(当時・六区)を見つけた。私が「母ちゃん、城間のお兄さんだよ」と言うと、「話があつたらやつて来なさい」との隊長の許しがあり、母と城間のお兄さんが少しだけ言葉を交わした。その後「元気で頑張つてね」と声をかけ別れた。それから昼、夜とさまよい歩いた。途中で、死んだ子供を背負った母親を見たが、いつ死ぬかもしれない自分の事で精一杯だったので、声をかけ助ける勇気もなかった。

◆ 母の死 ◆

真壁(現・糸満市)辺りに来ると隠れる壕も無かった。六月十五日の朝、木陰で休んでいた母親が破片で大腿部をやられ、夕方に亡くなった。「ああ、私より先に死ぬんだなあ」と思ったが、悲しむ余裕も無く、涙は出なかった。

そして、私は持っていた手榴弾で皆